

# 米水津村の出稼

紡績女工

## 紡績女工

米水津村では女の子が生まれると、家の者は大麥喜んだ。それは、大阪の紡績工場に行つて、予想外の多額の現金を送ってくれるからである。

ここで、宮野浦の榎リセ（七十六歳）の思い出の記録を紹介しよう（頃は大正末年）。

「当時、大阪方面への紡績会社へ行くときは、宮野浦から櫓船の渡船で浦代に着く。料金は三銭でした。浦代から峠を登り、近道をして木立に下りる。木立の角道には、*「べんやん」*、*「とりやん」*の二艘の船が、客を奪いあうようにして、竹竿で操りながら船頭町の操り場まで渡してくれました。

それからは、佐伯の葛港かづちから渡船で、沖合いの大阪行きのの船に乗りこみました。その渡し場が親子の別れで、

## 市野瀬 仁

（会員・佐伯市長島町）

悲しみの場面でした。なんといつても十二歳の春、親と別れ、ふる里を後にして遠い大阪へ出稼に行くのです。

会社づとめを始めた私達は、雨が降ったり、日暮れ時がくると、部屋の隅っこに行つて、シクシクと泣き出したのです。室長さんがなだめすかして、ひと苦労したものでした。

当時、会社の日給が六十五銭、食事代が十五銭、一日五十銭の残りでした。そうして、三ヶ月の養成期間が過ぎると、それぞれの腕しだいで昇給できました。お盆になると、四十円か五十円を初めて家へ送金したものでした。だから、女の子を会社にやっている親は、鼻が高かつたのです。

その頃、砂糖が百六十匁（約六百グラム）一斤が三銭でしたので、二人も会社にやっている家は、たちまちブ

ゲンシヤ（金持）になるといって、会社の人気と子供の  
 人気良かったのです。当時こんな歌を歌ってうっ憤は  
 らいしたのです。

女工女工とえらそうに言うな

月に十円二十円

もうけたお金は皆貯金

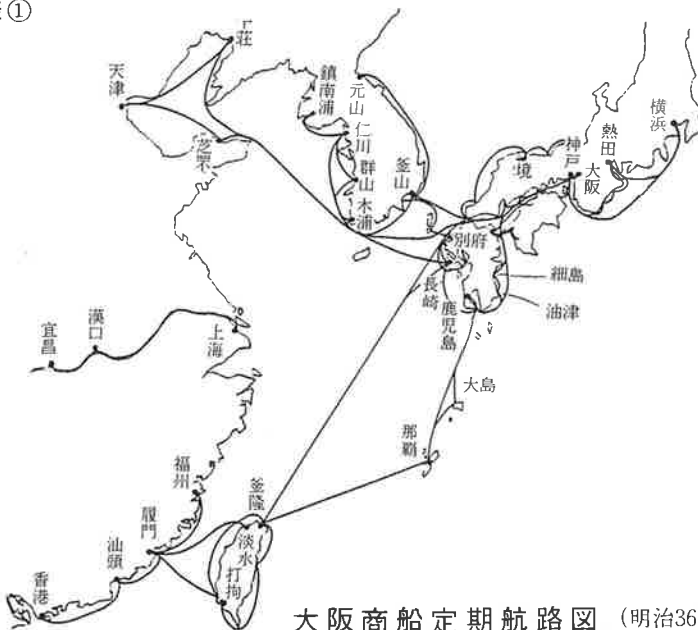
お金の土用干しして見しようか」

鶴見町の加嶋カツは、合同紡績尼崎神崎工場（後、東  
 洋紡と合併）へ就職する女工の募集人で、美人でもあり  
 きれいで、会社でも羽振りがきいていた。米水津の女工  
 はほとんど加嶋カツの息がかかった人達であった。

以上は、大正年間から昭和の初年に至る出来事である。  
 当時、汽車で行けば五円、船で行けば三日かかって三円  
 であった。時間はかかっても皆船で行った。加嶋カツは  
 五人や十人の女工就職の新米さんを、この船に乗せて何  
 回となく連れて行ったものである。

就職した女工は、ほとんど寄宿舎生活であった。一日  
 の仕事が終わると、食後の息ぬきに、佐伯から大阪までの  
 船の寄航地をもじった、先輩達の唄を聞かされたもので  
 ある。

別表①



大阪商船定期航路図 (明治36年末)

唄はこうである。

「佐伯出帆してネ 臼杵ちよっと着いて佐賀関、大分  
大分・別府・日出・守江・長浜・三ヶ浜・今治・多度  
津ヤネ、高松ヤ神戸乗り出す、まもなく大阪に着いた  
着いた」

両手で調子をとり、威勢のいいメロディに乗った光景  
であった。

現在

別府―大阪間関西汽船（大阪商船は前身）  
一五千七百円  
佐伯―大阪間国鉄料金 九千二百円  
米価では千四百倍となる

大正十一年―昭和五十九年



より糸木管、完全なものは、この2倍。

下の方は直径 15cm

一日の紡績工場の生活は、午前七時から午後五時まで  
の班と、午後七時から午前五時までの二交替制。その間  
休憩がある。

作業の製造過程は、綿棒―練糸機（糸の形にする）―  
粗紡機―リング―撚糸―カセバ（棉のあくぬき）―織布  
となっていて、女工はそれぞれ受持の仕事に取りかかる。  
食事は、朝の味噌汁から豆乳までつき、ご飯は十分食  
べられて申し分なし。すべて食堂で取る。

宿舎は、畳十六畳ぐらいに十人で、別に不便はない。  
こうした環境で一日の仕事が終ると、さきの歌が始まっ  
たりしてくつろぐのである。

給料は、勤務年数・会社・男女・役職に差があること  
は当然である。一つの会社に例をとると、大正初年頃、  
初給で、日給六十銭・月給十八円・送金十円、残りは食  
費と小遣い。やがて、日給八十銭・月給二十四円・送金  
十五円、役職につくと、日給一元・月給三十円・送金二  
十円から二十五円となる。会社によれば、日給、小卒五  
十五銭、高卒七十銭、月給十五円の人は、盆と正月にそ  
れぞれ賞与として二十五円がつく。

小浦地区の出納ヒチエ（七十七歳）は、十年間勤務し

て百円をため、ミシンを買って、残りの金は家計にまわした。

舎宅の見廻り役であった浦代地区の石田サミエは、二十五年間勤務して二百円の退職金をもらった。

米水津村から男工も行っていた。宮野浦地区の渡辺与一・渡辺虎一・小畑清治・大沢佐吉、色利地区の米沢市五郎、竹野浦地区の福永二郎・三股吉蔵等がいた。

家族ぐるみ定住した人々に、小浦地区の三原オワカ・古川弥太郎の二戸、宮野浦地区の四十田寛四郎家、浦代地区の高岸平太郎・中野重太郎・浜田喜三八・寺岡寿賀治・池部亀市・石田サミエの六戸が行っていた。

ここで、米水津村老人会会長の小西勇の話を聞いて、当時、大阪方面の紡績工の全貌を知ることしよう。

小西勇（七十八歳）は旧姓浜田。十四歳の時家族と共に上阪し、彼の地で高等科を卒業。大正八年、合同紡績尼崎神崎工場に入社した。就職のかたわら、大正十一年関西大学予科の夜間部商科を卒業。同十三年、二十一歳で帰郷した。

合同紡績尼崎神崎工場は、兵庫県川辺郡（尼崎の郊外）小田村にあった。米水津村の紡績工は、ほとんどこの工

場で働いた。外に神戸や名古屋方面に少し行った。付近には王子製紙・塩野義製薬・キリンビール、それに合同紡績会社を合わせて四大企業があった。とはいっても、周辺は広々とした田園が続いている風景であった。小学校三・中学校二校があり、三階建の文化センターもあった。四万二千人の人口を擁した村で、村民税が無税のため、尼崎市の合併に加わらなかつた。当時、日本第二の大きな村といわれていた。

神崎工場は、女工三千二百人・男工八百人、家族合わせて七千人。工場の寄宿舎は、二千八百人を容れる二階建。工員は九州人が主体で、特に鹿児島・宮崎についで沖繩・大分県人が占めていた。勿論、島根・広島・山口・宮城県人もいたが、これだけ大規模であったので、茶道・生花・音楽・スポーツ等の文化活動も活発だった。福祉施設機関もことかかなかつた。

女工の話では、祭日など、工員からなる郷土芸能は見ものであった。宮崎県人は盆踊り、慈賀県の盆踊り（江州踊り）、鹿児島県人は、ドスコイ・ドスコイ相撲踊りに小原節、伊予人の槍持ち踊りは忘れられない。勇ましいものでは、こんな唄が寄宿舎で聞かれて、次々と後輩

に引継がれた。

「明治三十七年の、日露戦争聞くたびに、心ますます勇み立つ、わが帝国に生まれきて、もしもこの身が男子なら、広きロシアに攻めこんで、赤髯長きロスケ奴を打ちとることはやすけれど、女子の身なれば是非もない ヨーイヨーイ大勝利帝国万歳ドッコイドッコイドッコイショ」

以上の紡績女工のことは、すべて関西方面であって、大阪を中心に名古屋にも大小の綿糸紡績工場がかなりあった。

大分県下では、大正三年（一九一三）大分紡績株式会社が、全面操業を開始している。続いて、大正六年（一九一七）片倉製糸株式会社大分工場が操業開始、大正七年（一九一八）富士ガス紡績株式会社中津工場、大正十一年（一九二二）に大分紡績株式会社は富士ガス紡績株式会社と合併し、同社大分工場となった。にもかかわらず、米水津村から大分の工場に行った人は、別表のとおり関西方面にくらべてあまり多くない。

それにしても、関西方面へ行く集団の力がどんなに大

きいかが分ると共に、米水津村が海に臨む関西依存型の伝統が明らかに見える。（別表は、19ページに掲載）

ここで、大分富士紡績に勤めた渡辺エン（八十四歳）を紹介しよう。

彼女は、戸数二軒しかない村内荒戸の出身で、十二歳で小学校を卒業すると、姉と共に一年半ばかり働いた。

大正後半、月給は五円ももらった。四時三十分起床。作業は六時から十二時迄。この間三十分休憩。午後は六時まで。寄宿舎は消燈九時まで自由時間があった。

米水津村に帰って、一年半ばかり竹野浦地区の大網方の山田先生宅に奉公。続いて佐伯町のある家の女中奉公をして、十六歳になって村に帰った。その後、大阪の大日本紡津守工場<sup>つもち</sup>で二年間働いた。

現在、彼女は目が少し悪いが、声に張りがあり、戸外の手仕事もする。小浦地区での集まりの時に話した彼女の昔物語りが面白い。

「汽車に乗るのに下駄を脱いだので注意された。今度は大阪の商船に乗ると、下駄をはいたまま上に上がって注意された」

と、皆を笑わせた。彼女は作詩の才もあり、当時歌わ

れたメロディに乗せたものか自作の歌を歌い出した。

よいよいよいと　よい所

募集人からだまされて

花の小浦を後にして

来てみりゃ淋しき旅の空

朝は四時半に起こされて

五時の合図にて食事する

六時になれば呼び出され

レンガ造りのガラス窓

たとえ所ぼうのことならば

主任さんからにらまれて

見廻りさんから使われて

寄宿に帰ればとりしまり

サラシの手ぬぐい肩にかけ

石けん箱を手に持ちて

お湯場をさして急がれる

お湯から帰りにぬる時にゃ

浅黄のふとんにござ枕

胸に手をあて思案する

これで私の身がもちようか

今度の勘定取りしだい

寄宿事務所にひまもらい

寄宿事務所がひまくれにゃ

門番だまして門をあけ

一番汽車に身を寄せて

内に帰りにふた親に

つらい夜業の語りすりゃ

二度と会社にかんの旅

ああ辛抱が足りない

ああ辛抱が足りない

会話してくれる七十、八十代の昔の女工さん達は、明治年間の事情は全く知らない。果たして先輩はいたのであろうかという疑問を持つ。

『あわしま』（第二巻）渡辺半一郎編集に、「小浦渡辺松五郎翁の部落回顧録後編」に次の記事がある。

第五回内国勸業博覧会（明治三十六年）を開始す。  
・予は小浦産の唐みかん出品するにより其の博覧会視察する事を村役場に於て予算会の節決定。視察の人員村長外議員三人を以て上阪・・。翌二十一日平野町紡績会社へ行き、尚この会社に工女三人、渡辺マキ、小西シ



別表②

米水津村 製糸・紡績工地区別就職人数（大正年間）

	関西方面	大分方面	男 工	家族同伴	延岡方面	紡 績 病
浦 代	32	0	4	6	0	3
間 越	6	0	1	0	1	3
田鶴音	9	2	0	0	0	7
久保浦	2	1	0	0	1	0
竹野浦	17	9	2	0	0	3
小 浦	4	4	0	2	0	0
色 利	59	2	7	1	2	9
大内浦	5	1	0	0	0	3
宮野浦	20	3	4	1	1	3
計	154人	22人	18人	10戸	5人	31人

(註) 家族同伴は戸数を示す。紡績病は結婚前後死亡した人数で確実な紡績病を示す。

ゲ、渡辺キミに面会する。種々便り之有り。三人に面会の上、中食を馳走になり会社内参観に及び三人に別れを告げ汽車にて天王寺迄是れより博覧会場及び市中遊覧買物かたがた歩行す。

とある。やはり明治時代に働いた先輩がいたのである。

大正年間に働いた人々の語らには、苦勞した悲惨な暗い話はなく、笑いに興じた昔物語りが交錯するのである。今でも桜の花の下で、あるいは縁日で友が集まれば、佐伯出

帆してね”の歌や、勇ましい歌で賑あうのである。

しかし、工場で働いたのが原因で、結婚前後の年齢の死亡した人が前頁別表のとおりの数を示している。だから笑いの背後には、きびしい諸条件があったことを見のがしてはならない。明治以来の蓄積された圧迫にあり、人権擁護のため会社経営者に対して、労働争議に戦った労働組合運動の尊い歴史があったのである。

日清戦争以後の日本の産業革命は、労働者の犠牲のうえに進められた。いままで記述したように、貧しく、口べらしのために働きに出た米水津の女工達は、大きく家計をうるおした。こうした貧しい全国の女工達の力は、明治以降の日本経済の発展の蔭の勇者でもあったのである。「絹は明治経済の防波堤」とか「女工こそ人類の母である」とまでいわれたのも、その真価をたたえられた言葉であった。

大正十四年七月、「女工哀史」を書いた細井和喜蔵は「哀史が出たからもう死んでもいい」と言ったとおり、出版されて一ヶ月後この世を去った。両親に恵まれず、十三歳の時、育ててくれた祖母が亡くなったので、その

春から十五年間紡績工場の職工となった。この間の体験を身をもって味わった彼は、女工をして「人類の母」と叫び、労働史の古典的名著といわれる「女工哀史」を書いて世に訴えたのである。

この著者は、女工募集を三期に分けて説明している。

第一期は、明治十年頃から日清戦争頃まで。この時期は、募集の安易な時代で「無募集時代」としている。即ち、女工に対して誘拐的な募集もなく、退社は自由で、強制送金なども存在しなかった。「あゝ初期の女工は如何ばかり、幸福に紡ぎ得たことか」と。

第二期は、日清戦争から日露戦争頃まで。日本産業革命の進展と大陸市場の開拓により、日本資本主義はいやが上にも労働者の犠牲を進められた。即ち、工場の数が増加した。帰郷して工場的情況を家族に伝えた。それがため募集を困難にしたので「自由競争時代」と名づけている。

明治三十六年農商省工務局刊行の『職事情』がある。その内容は、労働賃銀・労働時間・募集・寄宿舎・その他労働条件の全面にわたって大胆卒直な実態調査記録であったが、そのあまりの真実さのために、戦前の日本で



は、官庁報告であり乍ら、久しく翻刻され得ないままに止まっていた。

紡績工場の虐待として「紡績職工ハ幼少者ト云ハズ、婦女ト云ハズ、悉ク徹夜業ヲナスハ一般ノ事実ナリ」、……紡績工場の「労働時間ハ十一時間又ハ十一時間半（休憩時間ヲ除ク）ナルヲ通例トス」と。作業場は「屑綿塵埃ノ飛散スルコト……空氣ノ不潔ナルコト甚シク……身体ヲ害スルコト甚シ」と。

こうした悪条件の中で、前借金にしばられた女工達は「鬼々シキ主人ノ心ハ和カズ、虐待サレ」といった有様であった。逃亡を企てて失敗すると、「寒中裸体トナシテ毆打シ、若クハ冷水ヲ注ギ、或ハ制縛シテ毆打」するという虐待も受けたのである（日本歴史の視点・日本書籍）。

工場は地獄よ 主任が鬼で 廻る運転 火の車  
籠の鳥より監獄よりも 寄宿ずまいは尚ほ辛い

寄宿流れて 工場が焼けて 門番コレラで死ねばよい  
三度三度に菜っ葉を食いて 何で絲目が出るものか

こうして、日頃うっ憤をもらした女工達の大合唱が聞

こえるようである。表に見るとおり日露戦争後、明治四十年から大規模な労働争議が数を増し、明治四十三年（一九一〇）代には、組織的な闘争が行えるようになったのである。

第三期は、第一次世界大戦の勃発した頃で、わが国の工業も、軽工業から重工業へ、更に化学工業へ重きをなした時代である。大正デモクラシーの展開と共に各地にストライキも続発し、社会問題の発展の時期となる。

この頃になると、「募集地保全時代」が始まるのだがそこでは、一面でいよいよあくどい陰性な募集人の活躍が開拓されると同時に、地面では、巨大紡績工場における福利施設が開発され始めるのである。

さきの、細井和喜蔵の『女工哀史』もこの時期を舞台にしたもので、米水津村の女工生活を送ったのも、この時期であることは前に述べたとおりである。

ここらで大分県下に目を転じてみよう。

出稼土工及び綿糸・紡績女工の多いのは、リヤス式海岸地域を主とする北海部郡と南海部郡とされている。

この頃、大分県下でもストライキが進んでいた。当時

の『社会政策時報』一四号

(大正十年十月号)

は、次のように報じている。

大正十年九月十六日

求

解散手当要

大分紡績会社

社は今回富士

紡績と合併す

る事となった。

重役以外の職員職工につき一厘の解散手当もないと言

うので、不平の声昂まり二千五百余名の職員職工は結束

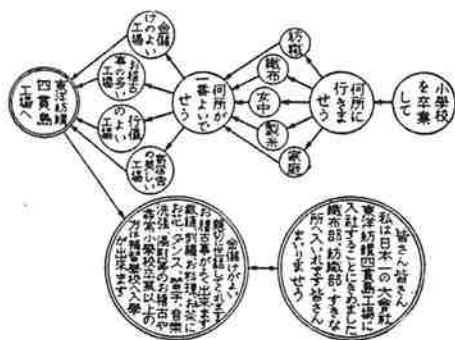
して職員に十万円、職工に十万円を支給されたしとの

要求を提出し、二十五名の委員を挙げて交渉中である。

当時、この工場の女工であった二人の老女の一人は、

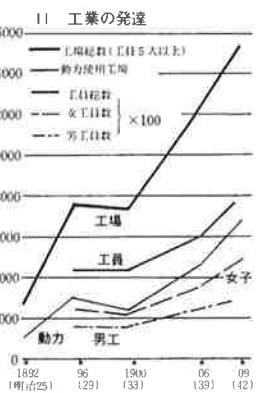
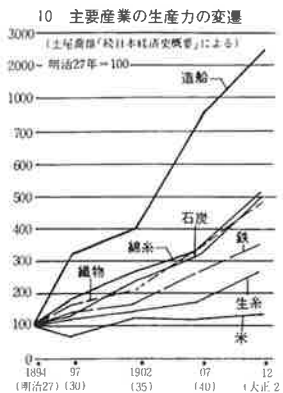
この時六十円、他の一人は五十円の手当をもらって、そ

別表③



「女工哀史」より

別表④



多い年になるが、労働組合も認められない時代、大工場

のほとんどない大分県では珍らしいことであった(「豊後おんな土工」古庄ゆき子)

女工女工と軽蔑するな女工は会社女工の千両箱女工女工と

見上げてくれた

国へ帰れば箱娘

早くねんあけ二親様に

つらい工場の物語り

こんな会社へ来るのぢやないが

知らぬ募集人にだまされて

うちが貧乏で十二の時に

売られて来ましたこの会社

しかし、これに代って製麻工場が盛んとなり、兵庫県シミレーン製麻株式会社へ、宮野浦から十名、大内浦・田鶴音から数名入社している。募集人は、宮野浦の山田喜一であった。

浦代から佐伯までバス、汽車で西大分へ、大分港から大阪へ着く。十円の旅費をもらって工場へ入社する。

製業工程も紡績工場と似ているが、仕事場によってはマスクをかけねばならなかった。出来高払いであったが

月給三十円を越す人もあった。

日清戦争後急激に進展した製糸・紡績工業の軽工業は日露戦争後は重工業へ、第一次大戦後は化学工業へと競争を契機にその様相を変えていった。労働者の犠牲の上立った大きな経済力に支えられて、軍事力は中国大陸へ巨歩をあゆみ始めたのである。

昭和六年（一九三一）満州事変の頃、インドから綿が入らなくなると、綿糸・綿紡績会社は不景気となり、閉鎖したものが多くなった。この頃から不気味な軍靴の足音が日に日に迫って来たのである。

かくて日中戦争、そして昭和二十年（一九四五）敗戦に至る十五年戦争の終末となったのである。

